

The Women's Studies Association of Japan

発行 日本女性学会
事務局 〒020-0124
岩手県盛岡市厨川4丁目13番8号
E-mail jyoseigakkai-info@genj.jp
ウェブサイト
<https://joseigakkai-jp.org/>
頒価 一部300円

学会ニュース

日本女性学会
第162号 2025年3月

目次

2024年度日本女性学会大会報告……………	1	少額研究活動支援……………	5
シンポジウム報告……………	1	次回大会お知らせ……………	6
シンポジウム参加者から……………	2	会員の著書紹介……………	7
パネル報告・ワークショップ報告……………	3	会員の著書紹介募集……………	7
個人研究発表一覧……………	4	会費納入のお願い……………	7
お知らせ……………	5		

2024年度日本女性学会大会報告

日程：6月8日（土）、9日（日）

大会シンポジウム

「女性学を継承する」

シンポジスト：上野千鶴子、佐藤文香

ディスカッサント：加藤秀一、古川直子

司会／コーディネーター：内藤和美、牟田和恵

シンポジウム報告

コーディネーター：牟田和恵、内藤和美

本シンポジウムは、女性学の継承の必然性と困難を共にひしひしと感じる中で発意された。多様な学問分野／テーマについてジェンダーに関する研究が行われるようになったいま、女性差別に抗し、女性としての経験からの理論化を試みる「女性学」は“狭い”のか？意義を失いつつあるのか？女性学が創出したと言える鍵概念「ジェンダー」の広がり／展開／深化は、女性差別や女性カテゴリーの問題を後景化させ、それらに対するうえで新たな困難を生んでいるかもしれない、だが逆に新たな可能性を生んでいるかもしれない—これらを問うて、シンポジウムでは、女性学のパイオニア世代の上野千鶴子会員とつづく世代の佐藤文香会員に発題いただき、加藤秀一さん（フェミニズム・ジェンダー・生命倫理学）・古川直子さん（ジェンダー／セクシュアリティ研究、精神分析理論）に討論いただいた。上野会員は「女性学を創る～世代間継承へ向けて～」と題し、日本の女性学の誕生と故井上輝子会員による定義の意味、制度化・アカデミズム化の過程、展開とくに「ジェンダー研究」への展開過程を辿った上、女性学の達成と課題を提起した。課題の指摘は、「女性」という集合的アイデンティティ自体、女性としての「経験」の重層性・多様性から、知の再生産システムに組み込まれることの功罪、ジェンダー概念の“標準化”等々多岐にわたった。佐藤会員は、「女性学とジェンダー研究の間—何が異なり、なぜすれ違うのか」と題し、女性学とジェンダー研究の関係の認識の違い等、

「女性学創設世代」と「ポストジェンダー研究制度化世代」のディスコミュニケーション、すなわち継承の困難の根本は、ジェンダー概念が、ジェンダー／セックス二元論の第2パラダイムから、二元論パラダイムからの解放（ジェンダー／セックスの区別の廃棄）を標榜する第3パラダイムへと移行したことにありと指摘した。そのうえで、世代間ギャップを架橋する、4通りの解放への道筋を提示した。「女性学の継承」の課題化のしかたが異なるお2人の発題を受け、加藤氏は、ジェンダー概念をどう使うかと、社会運動とフェミニズムについて見解を述べた。同じく古川氏は、①第2パラダイム：階層秩序（権力関係）としてのジェンダー概念と、第3パラダイム：性別二元論批判、2つの視点は両立するのか？、②ジェンダーへの自由とジェンダーからの自由は同時に実現するか？の2点を両発題者に問うた。これらへのリプライと対話、そして会場討論を通じて、女性学の継承を論じることの、生産的でありつつ困難を知るシンポジウムとなった。

シンポジウム参加者から

大会シンポジウムの感想① シンポジウムを聴いて

熊田一雄

2024年度日本女性学会大会の初日シンポジウム「女性学を継承する」を聴講した。充実したとても良いシンポジウムであった。

シンポジウムの冒頭で、牟田和恵氏から、女性学会の会員数がピークの2004年からほぼ半減していることに言及があった。昨年度の国際ジェンダー学会で江原由美子氏が、日本の大衆の間でのフェミニズムの「隆盛」は、日本がまだ物づくり大国で、一億総中流社会と呼ばれるほど階級格差が小さく、正社員の夫と専業主婦の妻のジェンダー格差ばかり目立った時代状況と関係がある、と述べ、フェミニズムの活路は、他の変数とのインターセクショナリティの開拓にしかない、と言っていたが、今回もそのことが確認されたように思う。

まず上野千鶴子氏と佐藤文香氏から、ポイントをきっちり押さえた総論が提出され、加藤秀一氏と古川直子氏が的確なコメントを行った。ディスカッションでは、冒頭で上野氏が他のパネリストの議論を「ジャーゴン、たこつぼ化、運動との乖離」と切って、刺激的な議論の火蓋を開いた。上野氏の言論活動を「攻撃、ヨイショ、誘惑的挑発」に分類するとすれば、典型的な「誘惑的挑発」であった。他のパネリストが戦略的に「ケンカを買った」ことによって、深みのある立体的な議論になった。

私が教えているような若いZ世代の学生に、例えば上野氏の『女ざらい』を勧めると、概して好意的に反応する。しかし彼らは、情報収集をスマホ経由でネット、特にSNSに頼る傾向があり、「ツイフェミ(Twitterのフェミニズム)」と「反フェミ」のわずか140字の議論に振り回されている。その点では上野氏の危惧は当たっている。

充実した時間であった。よいシンポジウムを開くことは、よい個人研究発表をすることよりも、はるかに難しい。シンポジウムを企画した方々、パネリストとして参加なさった方々に感謝したい。

大会シンポジウムの感想② 「女性学を継承する」ために

——女性学の半世紀の軌跡と未来への展望

永山理穂

シンポジウム「女性学を継承する」は、日本女性学会が設立された1979年から約半世紀を機に、女性学の固有性と現代的意義を再考することを目的として開催された。同シンポジウムでは、女性学創設世代の上野千鶴子氏と次世代の佐藤文香氏による報告が行われた。上野氏は女性学の歴史的展開と制度化の過程を振り返り、ジェンダー概念が権力概念であることを強調した。具体的には、女性学が民間学として始まり、やがて大学での制度化を果たしていった過程や、男性学の誕生、ジェンダー概念の精緻化を経て、より領域横断的な「ジェンダー研究」へと発展してきた経緯が語られた。佐藤氏は女性学創設世代とジェンダー研究の制度化以降にアカデミアに参入した後続世代の間の認識のギャップに焦点を当て、ジェンダー概念の捉え方の変遷やその概念の社会への影響力について論じた。ここでは特に、世代間の認識の差異の背景や、それぞれの世代が抱える課題について詳細な分析が提示された。

ディスカッションでは、加藤秀一氏と古川直子氏のコメントを交えて、ジェンダー概念の権力性、フェミニズムの役割、当事者性の問題など多岐にわたる議論が展開された。特に、「ジェンダーへの自由」と「ジェンダーからの自由」が両立する可能性や、生物学的性差の扱いが主な論点となった。加藤氏はジェンダー概念を拡張し

うる可能性について言及した。古川氏は階層秩序としてのジェンダーを問うことと、性別二元論を批判することを両立させうる可能性について問題提起を行った。

本シンポジウムを通じて、女性学・ジェンダー研究の歴史的意義と現代的課題が浮き彫りになった。世代間の対話や、理論と実践とを架橋することの重要性が再確認され、今後の研究と運動の方向が示唆された。特に、ジェンダー概念の捉え方や生物学的性差の扱い方をめぐる議論は、学術にとどまらず現実社会に大きな影響を与えることが確認された。

本シンポジウムは、女性学の継承世代にとって、自らの立ち位置を再確認し、今後の研究の方向性を深く考察する貴重な機会となった。創設世代から受け継いだ問題意識や方法論を、いかに現代社会の文脈に適用し、発展させていくかという課題の重要性を改めて認識させられた。今後の女性学・ジェンダー研究の発展に向けて、継承世代としての責任を新たに自覚する契機となり、参加者それぞれが自身の研究や実践を再考する機会となったことは、本シンポジウムの大きな成果といえるだろう。

.....
大会シンポジウムの感想③

2024 年大会シンポジウム

「女性学を継承する」に参加して

山根純佳

日本女性学会 1 日目のシンポジウム「女性学を継承する」に参加した。会場はほぼ満員の盛況であった。上野千鶴子報告「女性学を継承する一世代間継承へ向け」、佐藤文香報告「女性学とジェンダー研究のあい

だ」、加藤秀一氏、古川直子氏のコメント、それぞれから学ぶところは多かった。しかし女性学の継承をめぐる対話としては実りあるシンポとではなかったのではないだろうか。上野氏がとりあげた「I am not a feminist, but . . .」問題、女性学の制度化、ジェンダー関連学会の成立、バックラッシュ、学問の中立性の要求など、女性学からジェンダー研究への展開の中で得たもの、失ったものは何なのか、こうした論点については、ディスカッションでほとんど取り上げられなかった。

私は、「パイオニア世代に教育を受けた」第二世代（上野報告）に属するが、女性学の継承は厳しい状況にあると考えている。「ジェンダー」はどんな研究者も使う一つの変数なのであり、ジェンダー研究という独自の領域は必要ない、とする考え方に会うこともある。女性学・ジェンダー系の学会に入っていないが、「ジェンダー」や「女性労働」を専門分野とする研究者が増え、そうした研究分野で緻密な実証研究の成果が生み出されていることも確かである。こうした現状をもって、女性学は役割を終えた、とする考え方もあるだろう。

一方で、女性学は、「性差別的な社会を生きる私」というポジショナリティから出発して、差別や排除の経験を理論化し、男性中心的な近代社会の編成（政治、法、学問、公私区分）を問い直してきた。その意義は今一度確認される必要があるだろう。もちろん、女性学の担い手が女性であるべきといった狭義の「当事者性」にこだわる必然性はない。しかしこのポジショナリティを引き受けることで見えてくる課題や研究者の責任、またその責任から生み出されるつながりもある。その意味で、まだまだ女性学には残された役割がある、と考えている。

パネル報告・ワークショップ報告

.....
分科会 C ワークショップ

「経口中絶薬から考える日本の SRHR」をテーマとしたワークショップでは、Women on Waves（公海上での中絶）、Women on Web（中絶薬の郵送提供）、Aid Access（USA への中絶薬提供）と次々に、中絶が非法またはアクセスが難しい地域に安全な中絶を提供する組織を立ち上げてきたレベッカ・ゴンパーツさん、そのインタビュー映像（SOSHIREN 女のからだから制作）を観た後、3つのグループに分かれて、SRHR（セクシュアル・リプロダクティブ・ヘルス・ライツ）について語

り合った。

レベッカさんは、女には自分のからだをコントロールする力があり、中絶薬を使うことで医師によるからだへの支配から解放されると言う。そのうえで日本の女たちに市民的不服従を勧める。

グループ討論では、方向性までは出せなかったが、自分たちの力をもっと信頼できるようにしたい、墮胎罪が罪の意識を負わせている、留学先での避妊・中絶の情報・アクセスの違い、性教育を変えていく必要性、などが活発に語られた。

文責：長沖暁子

分科会 D パネル報告

「公共サービスの持続可能性を考える～ジェンダー視点で捉える公務労働」をテーマとしたパネル報告では、『自分ゴト』として考える公共サービス～研究と実践をつなぐために」(渋谷典子)、「非正規女性をがんばらせる構造と公務専門職の持続可能性」(廣森直子)、「公務職場における仕事の序列化とジェンダー～「専門職」として働く公務非正規女性の経験調査から」(瀬山紀子)の三人からの報告を行った。公務労働における非正規の問題をジェンダー視点で捉え、持続可能性・専門性・序列化といったキーワードが提示された。会場とのディスカッションでは、①専門性をどう定義づけるか、②女性が多い専門職とジェンダー課題の関係をどのように分析するか、③公務労働の特殊性を捉えつつ研究蓄積がある分野(たとえば、行政学)との接点を模索してはどうかといった質問と提案があり、今後の研究への示唆を得ることができた。

文責：渋谷典子

分科会 H パネル報告

分科会の H として、「フェミニズムと表現・出版・学問の自由」のパネルディスカッションを実施。報告者は、森田成也、キャロライン・ノーマ、中里見博。かつて表現・学問の自由に対する攻撃は、日本軍「慰安婦」や南京大虐殺、天皇などをめぐって主に右からなされていたが、現在では、トランス問題をめぐって左からなされている。この現状について、まず森田が、アビゲイル・シュライアーの『トランスジェンダーになりたい少女たち』をめぐって起こった事件について報告し、ノーマは欧米諸国ですでに深刻になっているフェミニストの言論に対する弾圧の実態について報告し、最後に中里見が、表現の自由論に関する従来の議論をまとめつつ、現在起きている言論抑圧はけっして擁護できないものであることを理論的に明らかにした。参加者は非常に多く、質疑応答も非常に積極的になされた。途中、「トランス差別だ」と叫んで退室した者がいたが、全体として報告に賛成する立場からも批判する立場からも意見が出され、民主主義的な討議の場を保障するものであった。

文責：森田成也

個人研究発表

分科会 A

馮可欣●能力となった美しさ —中国の高学歴女性の学校から職場への移行—

矢田陽子●スペインと日本の女性・母性表象比較：日本映画「母性(2022)」とペドロ・アルモドバル作品比較分析

趙男●女の表現からみる女性運動の「波」：『青鞥』から『女・エロス』、そして本日のジンへ

西田梨紗●おひとりさま女性のイメージの変遷—現代のおひとりさま女性が抱える問題とは

宮津多美子●「ベビーユートピア」の社会政治的アジェンダ：ギルマンの *Moving the Mountain* にみる社会主義フェミニズム

分科会 B

西川由紀●経済資本を獲得するためのひとり親の女性の労働に関わるハビトゥスに関する研究

池橋みどり●会計年度任用職員女性が感じる 2 種類の不安について —計量テキスト分析からわかること—

牧野雅子●「婦人警察官」の手記に見る婦人警察官制度の発足

渡邊麻友●ナミビアにおける女性牧師増加の背景と現状

永山理穂●「美」を売る労働はいかにジェンダー化されるのか—女性美容部員と男性美容部員の比較を通して

分科会 E

竹内愛●ネパールの若者の海外出稼ぎトレンドによるコミュニティ変容と女性自助組織の役割

甲斐田きよみ●女性の経済力向上と世帯内ジェンダー関係—カメルーンとナイジェリアを事例として—

佐藤齊華●移動は女性に何をもたらすのか：ヒマラヤからニューヨークまで、ある民族的コミュニティのケース

川口千尋●ジェンダー化された無国籍：現代ネパールにおける女性の市民権証取得プロセスに着目して

王嘉若●中国における家父長制理論の再考：フォーブスの家父長制理論にもとづく

分科会 F

五十嵐舞●アメリカ黒人女性のフェミニズムとパレスチナ

中林基子●介護保険制度開始後のケアマネジャー業務の制度的位置づけの変化と労働の変容

森恭子●ケアの倫理から検討する嫁の解放—奈良県奈良市旧都祁村の葬送・先祖祭祀を事例に

井上瞳●被害に遭わなければありえた世界とありえなかった世界の狭間で—日本の性暴力被害者支援をめぐる当事者のジレンマに着目して

三浦まり・大倉沙江・小谷幸・金美珍●女性団体に対する誹謗中傷を克服するために：女性団体包括的実態調査をもとに

分科会 G

佐伯英子●アイルランド共和国の中絶合法化運動における当事者のナラティブと中絶の脱スティグマ化

塚原久美●人権としてのリプロの権利

小塩若菜●月経時の水泳の授業への参加—大阪府の生徒と教師へのインタビューから—

孟令齊●中国人性的マイノリティの留学生における移住後の活動

于寧●クィアベイティングなのか、それともクィアコーディングなのか —二元論を越え 中国本土の主流映像作品におけるクィア表象を探る

お知らせ

日本女性学会 2024 年大会において開催された分科会について、発言や運営に問題があったとの指摘、批判がありました。これをうけ、幹事会では、幹事に外部委員を加えた調査ワーキンググループを設置し、指摘された事実の存否を確認し、具体的な問題について調査をいたしましたので、その結果を公開いたします。

日本女性学会は今回の指摘、批判を真摯に受け止め、「学会活動の自由と公正のための宣言」（2006 年 6 月 10 日、日本女性学会総会において採択）にもとづいて、大会を含めた学会運営の改善を検討してまいります。

調査報告書は、以下からご覧いただけます。

<https://joseigakkai-jp.org/>



2025 年 2 月 21 日 日本女性学会 23 期幹事会

少額研究活動支援

2024 年度の少額研究活動支援は、6 月の総会で、次の 2 つの研究に対して行なわれることが決まりました。

児玉谷レミ：自衛隊広報のジェンダー分析、

楊雅韻：「医薬品」から「化粧品」へ — 「化粧品」業界とジェンダー

次回大会お知らせ

【1】2025年度日本女性学会大会は、2025年6月7日（土）、8日（日）に立教大学池袋キャンパスで実施いたします。

会場：立教大学池袋キャンパス（対面）

大会日程（予定）：6月7日（土） ・14：00～17：30 大会シンポジウム

・18：00～ 懇親会

6月8日（日） ・9：30～15：30 分科会

・16：00～ 総会

【2】大会における個人研究発表・パネル報告・ワークショップを、下記の要領で募集いたします。

<個人研究発表・パネル報告・ワークショップ募集について>

- 締め切り：4月13日（日）24時
- 応募資格：申込時に入会の申し込みを完了していること
- 応募方法：カテゴリー（個人研究発表、パネル報告、ワークショップ）ごとに、下記のフォームに必要事項をご記入の上、ご応募ください。

個人発表 <https://forms.gle/e8tSdNaFXQDQXaNw9>

パネル報告 <https://forms.gle/p29QBe2RETBWnQnd8>

ワークショップ <https://forms.gle/vWZpigNK7dkhoyEu6>

URLで入力できない場合、事務局にご連絡ください。

日本女性学会 事務局 [jyoseigakkai-info](mailto:jyoseigakkai-info@genj.jp)（アットマーク）genj.jp

- ・個人研究発表：発表タイトル、発表者名（所属）、要旨（300字以上400字以下）
- ・パネル報告：パネルタイトル、コーディネーター名（所属）、各発表者名（所属）、各発表タイトル、各要旨（300字以上400字以下）、司会者名（所属）
- ・ワークショップ：テーマ、コーディネーター名（所属）、各発表者名（所属）、概要（300字以上400字以下）

- すべての個人研究発表、パネル報告、ワークショップは、「学会活動の自由と公正のための宣言」のもとで行われます。
- 個人研究発表は、ひとつの分科会で、複数の方に発表していただきます。発表の組み合わせ等は幹事会で決定します。
- パネル報告は、共通するテーマの3件以上の研究発表で構成してください。公平な時間配分と十分な質疑時間の確保にご留意ください。
- ワークショップは、参加者との共同作業でテーマを発展させていく取り組みで、研究発表とは性格の異なるものです。原則として複数の発表者が分科会全体（2時間程度）を担当していただきます。
- 発表者、コーディネーター、司会は会員に限ります。応募の際にご確認ください。非会員の方は応募時にご入会ください。
- 個人研究発表・パネル報告・ワークショップをされる方で、学生、院生、OD等、常勤職についていない方には、学会より旅費の補助を行います（総額10万円を人数と距離に応じて配分しますので、補助金額は未定です）。希望される方は、報告申込の際に、その旨記載ください。

会員の著書紹介（出版年が古い順）

- *矢内琴江著『性差別を克服する実践のコミュニティ』明石書店、2024年
- *久木田絹代著『中学生が綴る労働とDV—語る・聴く・交流が生み出すエンパワーメント』労働教育センター、2024年
- *岩淵宏子著『女性表象とフェミニズム—日本近現代女性文学を読む』翰林書房、2024年
- *小山美沙子『詩集 原始星』一粒書房、2024年
- *江原由美子編著『ジェンダーと平等』ミネルヴァ書房、2024年
- *岩淵宏子他著『現代女性文学論』翰林書房、2024年
- *有元伸子他編『文学をひらく鍵—ジェンダーから読む日本近代文学—』鼎書房、2024年
- *宮津多美子著『異文化コミュニケーション入門—ことばと文化の共感力』勁草書房、2024年

会員の著書紹介募集

以下のルールで会員のみなさまの著作を紹介します。掲載ご希望の方は、事務局までご連絡ください。

- ・会員が執筆・編集している単行本（分担執筆含む、雑誌をのぞく）
- ・1年以内の発行物
- ・ご本人の申し出があったもの
- ・寄贈は条件としない
- ・寄贈いただいたもので会員の著作と判明したもの

会費納入のお願い

- 2024年度までの会費が未納の方は、どうぞお早めにお支払いください。会費納入のお願いと払込用紙はすでに送付しております。払込用紙をなくされた方は、郵便局備え付けの払込用紙をご利用のうえ、下記の納入先までお振込みください。

ゆうちょ銀行 振替口座

口座記号番号 00890 - 6 - 31306

加入者名 日本女性学会

- ネットバンキングでも納入できます。

ゆうちょ銀行 支店名：089（ゼロハチキユウ） 預金種目：当座 口座番号：0031306

- 日本女性学会の会費は年収スライド制（自己申告・税込み・該当年度予定収入）をとっております。

- ・ 400万円未満（無職・学生含む）：6,000円
- ・ 400～600万円未満：8,000円
- ・ 600万円以上：10,000円

- 3年以上会費を滞納されている方は退会とみなされます（日本女性学会幹事改選選挙実施規定第4条（3））。複数年滞納されている方は、過不足なくお支払いいただくためにもご自身の納入状況を事務局にご確認のうえ、どうか早急にお支払いください。

- 学会の運営は会員のみなさんの会費によって成り立っております。重ねてのご協力をお願いいたします。

- 永年会員制度をご活用ください

2021年度から永年会員制度が開始されました。前年度までの会費を納めている65歳以上の会員は、前年度会費額の3ヵ年分の納入によって会費完納とし、永年会員とすることができます。振り込み時に「永年会費」とお書きください。

65歳以上の会員の皆さま、どうぞご活用ください。